



book

書評『DHが行う インプラントメインテナンスのスタンダード』(岩崎美和・著／木津康博・監修)



『DHが行う インプラントメインテナンスのスタンダード』
(税込 3,780 円、小社より好評発売中)

インプラントメインテナンスは日常臨床のなかの非日常と言えるかもしれません。そもそも歯科衛生士には歯を守り、長期存続させるというミッションがあり、そのためにあらゆる手段の口腔ケアを提供することが、日常臨床における業務です。しかし、インプラント治療においては、既に何らかの理由で歯を失った経験をもつ人たちが対象です。そうした方々に生体外物質を埋入することで口腔機能を回復させるという治療は、歯を守るために働く歯科衛生士としては、非日常的といえます。

インプラントメインテナンスを追求しようとするれば、当然治療について、また解剖や病態、治療の病理の理解が必要となります。特にインプラント体の種類や構造、天然歯との違い、骨結合のメカニズム、上部補綴物の知識は欠かせません。歯の喪失理由も、インプラントの予知性を左右する重要な項目といえます。更に、術前の歯周病初期治療技術、全身的管理や埋入状況に至るまでの情報を把握することが、インプラントの予後を良好にする条件なのです。これらを網羅する必要があるインプラントメインテナンスは、歯科衛生士にとって最もアドバンスな業務といえます。「インプラントメインテナンスはどのような手順で何を使って行うのですか？」という質問をよく受けますが、単に PMTC を行えばよいというわけではないところに難しさがあります。

1970年代に、骨結合の発見により口腔インプラントが第2の歯として歯科医療に出現して以来、多くの遍歴を経て、一般クリニックでも簡便に行えるように術式などが改善されてきました。そして、現在では全国約7万軒の歯科診療所のうち、4軒に1

軒がインプラント治療を標榜しているようで、欠損歯補綴への有力な選択肢として市民権を得るようになりました。その一方で、インプラント周囲の骨が破壊されるインプラント周囲炎が、今後増大することが懸念されています。2008年の Zitzmann & Beglundh の10年間の研究(Journal of Periodontology 6th European Workshop on Periodontology, 2008)では、埋入されたインプラントの3割以上にインプラント周囲炎が発症している事実が発表され、大いに驚かされました。インプラント周囲炎の前段階には、歯肉炎に相当するインプラント周囲粘膜炎があり、この対応が、歯科衛生士の腕の見せどころです。

患者さんにとっての大切な第2の歯を守るためには、単なる How to ではなく、科学的知識の積み重ねによるケアの提供が必須です。しかし、そうはいわれてもあまりにも茫漠としていて何をどの順序で学んでいけばよいのか、多くの歯科衛生士は悩んでしまうのではないのでしょうか。今回、岩崎美和さんがまとめられた本書は、インプラント治療におけるポイントが網羅され、基礎知識から臨床までを具体的にわかりやすくまとめられており、素晴らしい指南書といえます。1章から流れに沿って勉強することもできますし、疑問解決になる章を熟読するのもよいでしょう。ただし、表題の“スタンダード”については、「学会等により発表されたプロトコル」を指しているのではなく、あくまでも「現時点での標準的な」、「基本的に行うべき項目」という意味で解釈していただけるとよいと思います。

インプラントは日進月歩に進化しています。20年前の方式が消えていったように、10年後には現在のものは過去になり、より進化した再生医療としてのインプラントが出現しているかもしれません。しかし、いつでも患者さんの生体には新旧のインプラントが混在し得ることを忘れてはいけません。

今回、院内歯科衛生士として多忙な業務の傍ら、膨大な文献を読み、スライドを整理し、本書をまとめられた著者の努力に敬意を表します。そして、岩崎さんには若きリーダーとして、今後ますますの活躍に期待を寄せています。

(文・小林明子／小林歯科医院・歯科衛生士・歯科技工士)